

指定管理者管理運営状況（平成29年度～令和2年度）

指定管理者管理運営状況

年度	指定管理者	指定管理期間
R2年度	公益財団法人滋賀県陶芸の森	平成28年4月1日から令和3年3月31日まで
R1年度		
H30年度		
H29年度		

成果情報	H29	H30	R1	R2	備考
利用可能日数(単位:日)	306	306	292	286	コロナ臨時休園 R1/14日 R2/21日
年間利用人数(単位:人)	353,781	346,164	448,557	339,892	
1日あたり利用人数(単位:人/日)	1,156.1	1,131.3	1,536.2	1,188.4	
年間収入(単位:円)	215,625,642	221,209,011	230,040,362	235,166,092	
1日あたり収入(単位:円/日)	704,659	722,905	787,809	822,259	

収入・支出実績 (単位:円)	H29	H30	R1	R2	備考
収入①	215,625,642	221,209,011	230,040,362	235,166,092	甲賀市信楽産業展示館収入除く
施設利用収入	15,505,237	15,430,636	22,115,157	16,717,117	
指定管理料	171,830,000	171,830,000	172,685,000	173,539,000	
その他収入	28,290,405	33,948,375	35,240,205	44,909,975	
支出②	216,173,793	220,324,645	229,185,201	235,598,056	甲賀市信楽産業展示館支出除く
人件費	92,089,677	89,189,500	94,342,711	96,264,171	
施設管理費	61,471,766	59,677,898	64,828,790	60,945,822	
事業費	62,612,350	71,457,247	70,013,700	78,388,063	
収支 ①-②	-548,151	884,366	855,161	-431,964	

モニタリング実施状況(令和2年度)

報告書の別	内容
年度報告	年次事業報告書(令和3年4月報告)
月例報告	月例業務報告書(毎月報告)
実施調査	令和2年11月、令和3年3月 実施

利用者ニーズの把握

手法・実施時期	展覧会観覧者(会期毎)、陶芸体験講座参加者(年間)、イベント開催時来場者(9月)に対する利用者満足度調査の実施
実施内容	来園者等へのアンケート調査
調査結果	<p>・令和2年度は、展覧会では4つの企画展を開催したが、それぞれの満足度(大変満足・満足)は、85%、70%、78%、92%であった。陶芸体験講座では全体を通して満足が88.7%、イベント開催では良い・とても良いが88%との結果であり、何れの事業においても概ね高い評価を得ている。</p> <p>【アンケートの主な声】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・展覧会：非常に良い企画で素晴らしかった。 作品の後ろ側を見られるように鏡などを置いてもらえるといい。 ・陶芸体験講座：講師が優しく丁寧に指導してくれた。いい経験ができ、勉強になった。また、参加したい。 ・イベント開催：コロナ感染症対策がしっかりとできていてよかった。また、来たい。 渋滞でかなり待ったので、駐車場案内の掲示やアナウンスが欲しかった。

工夫・成果のあった点、運営上の課題

・令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の流行によって、陶芸の森においても臨時休館や各種イベントの中止、陶芸作家の受け入れ延期など大きな影響を受けたことから、コロナ禍にあっても陶芸の森の魅力を感じていただけるよう、展示品の3D撮影や360度撮影によるバーチャルミュージアムの開設など、アフター・コロナに向けた新たな集客対策に取り組んでいる。

・陶芸の森は開設から30年余りが経過し、施設設備の不具合等の発生も顕著となってきている。年々増加する維持修繕費が他の事業費を圧迫する中で、限られた予算等の制約から、毎年度、集客が見込める展覧会の開催が困難となりつつあり、結果的に観覧者が減少していくという悪循環に繋がっている。そうした状況を踏まえ、メリハリのある運営を念頭に、集客に繋がるいわゆるビックネームの特別展開催までの間は、広報にも工夫しながら、収蔵品ベースの展覧会等を効果的に開催し、経費節減に努めている。

・研修棟や管理棟などは、当初の集中管理型空調設備を廃止し、個々の部屋ごとに冷暖房設備・器具を設置するなどして、燃料費の節約に努めている。また、デマンドを導入して、消費電力が増大する夏季は、一時的に陶芸館の空調運転を停止するなどして節電を図っているが、その都度、来館者にも不快な思いをさせるなど、限界に近い状況に至っている。